

柏崎市立高柳中学校 一年 末山 誠ニ  
未だに動き続けるストッ  
アッ  
チ  
カシその笑い声は、一瞬で消えることとな  
る。十月二十三日午後五時五十分。中越  
の人々を何日も、何ヶ月も苦しませるスト  
パウァが動き出した。頭の中が真っ白に  
なるようになり、僕も僕も僕も僕も僕も僕も  
目の前の食料を一つも持たないで、たたひた  
すら家に向かっ、て走った。その途中、母をふ  
くめる数人の区民がゴゴと敷いてじ、として  
いた。僕もその中に入った。  
時刻は六時をまわり、停電したため周りは  
暗く寒かった。何度も続く余震に僕の口びる  
は、まるでチカッ、を閉めたような状態だ。  
た。そして信じられないような一報が近所の  
人から届いた。  
「近くの市では、死傷者も出ているそうだ。  
その時僕は、これは歴史に残る大地震だ、と  
確信した。そして区民はとうとう、数台の車

に乗りこんだ。  
次々とうラジオが聞こえてくる地震情報は  
今度はロガポカんと開いたままだった。時計  
は九時近い。五時五十分分に動き出したスト  
ッアウオッ。午は三時間を数えようとしていた。  
しかし、余震がピタッと止まるあけではなか  
った。そんな状況に僕は、寝ることもできな  
かった。そんな中僕は、ラジオのFM放送に  
耳を傾けていた。僕は外に出て背のびをしよ  
うとした。その時目に写ったのは、心配そう  
な顔をしているお年寄りだった。その表情は、  
地震による、受けた精神的ダメージの大きさを  
その語っていた。  
僕は車に乗ると、とつ然ある事がバ配にな  
って来た。それは、今親友達がどのような状  
況にあるのかがということだった。  
「無事についてくれ。」  
と願い、いつの間にか寝だてしまった。  
翌朝、僕は六時に起きた。ストッアウオッ  
午が動き出して十二時間。家に戻る人は、

よても重たうなほどりだつた。